

岡本一平氏の発表論文に対する コメント

周 齊*

(中国 社会科学院)

岡本教授は長年にわたって『大乘義章』の研究に携わっており、この論文は、間違いなくその長年にわたる研究成果の一部である。

何十年、あるいは一生に亘って一つの経典、あるいは事柄を中心に突っ込んだ研究を行い、それを点から面へと広げてゆく手法は、多くの日本の仏教学者の研究の特色となっている。歴代の学者たちの弛まぬ努力と学問の継承によって、日本の学者たちは仏教経典研究の分野で着実かつ豊富な成果を挙げ、また、独自の学問的伝統と特色とを形成している。岡本教授の論文にも、この伝統的学風が示されている。

論文が焦点を当てているのは、『大乘義章』中の「三仏性」と「二種性」の問題である。岡本教授の研究によると、「三仏性」は慧遠の創唱であり、仏性を三身に対応させるのは、瑜伽行派が三身で仏を解釈したことの思想的影響を受けたためである。しかし、仏性と三身を対応させれば、必然的に問題が生じる。例えば、報身・応身の二身と法身とは有為・無為を異にするため、「三仏性」が不一不異の関係にあるという論理的困難に陥るのである。慧遠は、『菩薩地持経』の中の「性種性」「習種性」によって、「二仏性」と「二種性」の間に因果関係を構築し、「法仏性者は性種因。報仏性者は習種因」という形で「三仏性」説に含まれる理論的欠点を補おうとした。岡本教授の分析によると、この因果関係は架空のものに過ぎず、「法仏性」と「性種性」、「報仏性」と「習種性」は名前の上だけの相違で、内容には大した相違はないという。そして更に、曇無讖訳『地持経』の持つ翻訳上の問題も、慧遠の解釈を更なる困難に直面させるものであったと指摘している。だが、この論文で岡本教授は、『宝性論』の『如来藏経』に対する解釈を分析して、詳細に論じられている一仏性と三身の関係が、

*中国社会科学院世界宗教研究所研究員。

必ずしも唯一の正解とは言えないにしても、「教義的な意味」のある解釈であると認めている。

本論文の結論は以下のごとくである。慧遠と『宝性論』が直面したのは、実は同様の、仏性と三身の関係についてのものであったが、『宝性論』は、二種仏性、つまり、gotra を媒介として、仏性と仏の三身の間に教義上の意味的連関を生み出し、慧遠は、三身で仏性を解釈し直して「三仏性」説を創唱した。彼がインドの瑜伽行派の經典である『地持經』中の「二種性」の概念を引くのは、「三仏性」説を権威づけるためである。

岡本教授のこの論文は、関係する概念や思考の道筋を緊密な関連のもとで相互に論じており、また、直接関係のない『宝性論』の例を引いて、一見したところでは、回り道のように感じられるかもしれない。しかし、問題点は明確であり、論拠と論理の展開にも矛盾はない。原文の解釈や推論については私と考え方を異にするところがあるけれども、結論そのものに影響を与えるものではないから、紙幅の関係で省略し、ここでは、いくつか雑駁な質問を提起して岡本教授の教授を仰ぐことにしたい。

本論文によると、仏性と三身の関係は『撰論』の後に瑜伽行派において問題にされるようになったテーマであり、慧遠が「三仏性」説を創唱したのもこの思想的動向と関係するとのことである。であるなら、この問題とそれに対する慧遠の答えは、いかなる意義を持つものなのか。

「三仏性」は「仏性義」の「弁性之体状」の中で提起されたものであるが、その文章は、

仏性者。蓋乃法界門中一門也。……四対果分二、法仏性、報仏性。……
四対果論三。法仏性・報仏性・応仏性。

というものである。法界門において三身で仏性を解釈しているように見えるが、だとすれば、「三仏性」の「性」には「界」の意味が含まれているのか。もしそうなら、種姓と関係するのか。あるいは、「三仏性」と「二種性」が結び付く論理となりうるか。慧遠が「三仏性」説を創唱したのは、仏性と三身の関係をどのように解釈しようとしてなのか。

論文で言われているように、「二種性」によって「三仏性」説の理論的欠点を補うというのが、実際には同語反復のようなもので、何の意味もなく、権威づけのためだけのものであるのなら、慧遠による「三仏性」説の

創唱は、事実上、理論的価値のないものであったと言えるのか。

法身や仏性等に関する問題は、魏晉南北朝時代にしばしば論じられた重要な問題である。廬山の慧遠が鳩摩羅什に尋ねた問題の三分の一以上が法身に関わるものであったし、また、吉蔵の『大乘玄論』は、仏性説「十一家を通論する」ものであった。しかし、岡本教授の分析によれば、「六朝の仏教」を総合して「総詮通論の書」を著わした浄影寺慧遠にとっても、これは依然として問題であったのである。道宣は『大乘義章』が「仏法の綱要はここに尽きている。学者が必ず基づくべきもので、知らないでは許されない」著作であると言っている。しかし、岡本教授の結論は、これとは異なる見方を提示しており、「書物を全て信ずるなら書物などない方がよい」という諺の意味を学者に気づかせてくれた。

(翻訳担当：伊吹 敦)